

## 雨の世間話

パク ジュンウ (朴俊禹)

普段よく使われる話術のひとつに「世間話」がある。誰に聞いてもある程度共感できる平凡な話題のことだ。世間話を数分すると、お互いの緊張がほぐされて本題に入るのもより簡単になる。その世間話の代表として愛用されているのが天気の話だ。

バンクーバーはあだ名に「レインクーバー」というのがあるぐらい雨が特徴的な都市である。春から夏にはほとんど雨が降らず、秋になると冬まで長々と雨が続く。雲と雨の日が続く光景をみると「レインクーバー」というあだ名ができたのも理解できる。この特徴のある天気のおかげで、バンクーバーの世間話は夏までのいい天気とそのあとを比べる内容が多い。

しかし、この世間話にも変化が起きている。ついにバンクーバーにもたどり着いた気候変動のせいである。ここ数年間、バンクーバーの夏は平年のそれと大きく違った。バンクーバーでは珍しい30℃以上の猛暑が続き、BC州の内陸地方では大規模の山火事が相次いでいた。天気の世間話も、「いい天気」の話は少なくなった。

その中、今までは聞いたこともない「雨が降ればいいのに」という声を耳にしたのだ。もちろん、山火事と猛暑にはいい解決法になるが、それにしても雨が欲しいという言葉はバンクーバーでは聞いたことがないものだ。なら雨の印象が良くなったのかというと、今の時期はまた「レインクーバー」の原因として愚痴の対象になっている。夏には必要だったのが数ヶ月後には愚痴の対象になるなんて、夏には話題にもならなかった過去と比べると雨が可哀想になるほどの変化である。

この雨に対する認識の変化から、私は人間の意見の軽さについて考える。同じ雨でも歓迎されるのか嫌われるのかは、ただ雨がその時に必要かどうかによる。一時的な感情と出来事で雨に対する意見が急変するのだ。この意見の急変は、雨に限ったことではない。人間関係の中でも、同じ人を急に親しく思ったり嫌いになったりすることがある。よく考えてみると、その変化も一時的なことが原因の場合が多い。意見というものの軽さが実感できる場面である。

もちろん、だからと言って人の好き嫌いが固定されたらそれはそれで問題になるだろう。ただ、普段持っている感情をもう一回考え直してみる一歩として雨はいいきっかけになりそうだ。または、どのようにバンクーバーの雨に

対する自分の意見ができたのかを話してみるのもいい世間話の話題になるだろう。